

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

今年七月末、米ソ両首脳は九年ごしに交渉されてきたSTART条約に調印した。この条約は屢々指摘されているように欠陥だらけの条約である。軍縮の対象になる核兵器は当初の五〇パーセントという目標を下まわって今後七年間に三〇パーセントの削減が予定されているに過ぎない。しかもこの数字は名目上のもので、具体的に計算すると実際の削減率ははるかに小さい。さらに削減される核兵器はおそらく旧式のものも多く、また共同宣言で示された海上又は海中発射型の巡航ミサイルの保有制限量は両国の現有量よりはるかに高く設定されているので、これは事実上核兵器の近代化を目指したものであるとも批判されている。特に中長距離核兵器の多くが海軍艦艇に搭載されているアジア太平洋地域においてはこの条約による核兵器削減の効果はあまり期待できない。

しかしこのような欠陥にもかかわらず、核戦略兵器がとにもかくにも削減されることには意義があり、このこと自体は歓迎されるべきであろう。問題は今後核軍縮がさらに進展するかどうか

規模での運動を提起しました。また調査活動に取り組む高校生の活動を感動的に描いた映画『ビキニの海は忘れない』も全国的な上映運動を背景にビデオが完成し、(62分・45分の二種、各六千円、五千円)、利用を訴えています。(パンプ、ビデオとも協会が普及)。

START条約後の核軍縮と日本

山田 英二

にある。米ソ両首脳とも第二次START交渉を始めると言明はしているのだが、その具体化はまだ明らかにされていない。米ソとも原理的には核軍縮を継続する必要性を認めているが、実際にはそれをさし迫るものとは考えていないように見える。

モニーを維持しようという意図は決して失なわれてはいない。そのような考え方からすれば、財政的負担の許す限り、第二次START交渉は緊急の課題ではない。むしろ非核保有国に対する抑止力としてある程度の戦略核兵器は保持したいという意図もあるものと思われる。

(金沢大学名誉教授)

高知県ビキニ水爆実験被災調査団、新たに調査資料を公開

八月二日、ビキニ被ばく漁船の追跡調査をすすめている「高知県ビキニ水爆実験被災調査団」が総会をひらき、いままでの調査結果などを発表しました。

一九五五年に日本鯉鮪漁業協同組合連合会がまとめたと思われる「漁船別ビキニ慰謝料配分一覧表」が新たに発見され、そのリストも公表されました。リストは被災船の全容を明らかにする上でも貴重な資料で、県別、漁船別に支払われた慰謝料の内訳が克明に示され



堺市平和と人権資料室の写真展

堺市で夏休みに水爆実験被災者写真展。フォトジャーナリスト豊崎博光さんの「放射能におおわれた島」グッドバイ ロングセラップ」写真展が、八月十五日から三〇日まで堺市平和と人権資料室のフエニクスホールで開かれました。第五福竜丸の展示組写真「忘れ得ぬ船第五福竜丸」(二三枚)もあわせて展示され、市民およそ千名が見学し、ビキニの被ばくの真相を心に刻みました。

同資料室が、「核兵器の恐ろしさ、今も続く住民の苦しみを知ら

てもらい、核汚染と地球環境について考え直す機会にしてほしい」と、夏の特別展として企画したもので、市内の学校、地域の子ども会が夏休みの自主学習としてとりあげたり、学校の先生の見学も多くなりました。期間中、一日三回、『ビキニの海は忘れない』『第五福竜丸』のビデオが「風が吹くとき」「風の谷のナウシカ」「火垂るの墓」などとともに上映されました。「全国の同じような資料館ももっとPRをして、若い世代を啓発していったほしい」などアンケートにも反響がありました。

第五福竜丸賞

八月十一日、東京北区の公会堂で第二十二回原爆忌東京俳句大会(同実行委主催)が開かれました。全国から寄せられたおよそ二千の俳句の中から、東京都知事賞などが発表され、第五福竜丸平和協会

山形から夏の修学旅行

夏休みに「宿題」で展示館を訪ねた高校生は千名ほどになったでしょうか。熱心なその見学に励まされる思いがしました。その中を東京都が広報で募集した「夏休み親子プラン施設見学会」が何組か展示館を訪れました。

賞には、和田つねおさんの次の句が選ばれ賞状が贈られました。補聴器の中まで炎天広島は

「広島」「アジヤ」(中)

アジヤを黙殺した46年間

清水文裕

被爆四六周年の今年、広島でもアジヤ・太平洋地域への戦争加害が真剣に語られ始めた。敗戦後、日本は加害の歴史を忘れたような顔をして欧米志向を強め、経済至上主義の道を突き進んだ。広島もまた、過去に目を閉ざし、「世界で唯一の被爆国」と訴え続けた。その偏狭な姿勢が、満州事変勃発六〇年、日米開戦五〇年の節目を迎えてあぶり出されたように見える。

八月六日、平岡敬広島市長は平和宣言で、アジヤへの加害を謝罪した。「日本はかつての植民地支配や戦争で、アジヤ・太平洋地域の人びとに、大きな苦しみと悲しみを与えた。私たちは、そのことを申し訳なく思う」

印象をぬぐえないが、平岡市長がアジヤへの謝罪をこの一節に盛り込んだことは明白である。

平岡氏は旧制中学生時代、京城(今のソウル)にいた。敗戦後、日本に引き揚げてジャーナリストになり、被爆韓国・朝鮮人問題を書き続けた。著書『無援の海峡』(一九八三年、影書房)で「日本国家と日本人の責任を抜きにしては被爆朝鮮人問題を語ることはできない」「私自身、加害者であり続ける日本人の一人」「日本が朝鮮の植民地支配や朝鮮人被爆者について責任を感じない限り、朝鮮人の心は日本人に開かれない」と強調している。その歴史認識を、今年二月市長に就任した平岡氏は初の平和宣言に盛った。

しかし、平和祈念式の会場で会った旧知の在日韓国人被爆者は「抽象的すぎて、謝罪の気持ちが伝わってこない」と苛だちを隠さな

かった。その口調には、怒りを押し殺したような響きがあった。謝罪が極めて穏やかな表現になった理由は、おそらく右バネからの反発を懸念したためだろう。だが、そのような配慮をしなければならぬ現実こそ、戦争の恥辱の歴史をあいまいにしたこの国の戦後の処し方の特異性を浮き彫りにしているのではないか。

中国新聞が式典会場で行ったアンケートでは、謝罪を肯定的に受け止めた人が六六%、否定派一六%だった。残りの一八%は評価を避けた。否定意見では「被爆者に直接の責任があるわけではないのだから、慰霊の場での発言としては不適切」という指摘が目立った(八月七日付二面)。

確かに被爆者に直接の責任はなかったかもしれない。しかし、広島はアジヤ侵略の出撃拠点だった。マレー半島とシンガポールで住民虐殺を行った部隊は広島第五師団である。市民生活も軍都の歩みに直結していた。市内の橋梁が幅員の広い鉄筋の橋に次々架け替えられたのは、重い軍事物資を輸送するためだった。日中戦争時、既に地域の二〇%以上が軍関係機関・施

設で占有されていたという。結果的に市民が戦争遂行体制に組み込まれていたことは否めない。誤解を恐れずにいえば、日本人一人一人がアジヤ侵略の加害者だった。戦後世代も戦争責任をあいまいにした時代を生き、繁栄を享受したという意味で、また加害者である。

アジヤ・太平洋地域に日本がもたらした戦争の傷はいまだに癒えていない。越田稜氏編著の『アジヤの教科書に書かれた日本の戦争』(一九九〇年、梨の木舎)を読むと、アジヤの人々が広島、長崎への原爆投下を侵略解放の象徴として受け止めていることがよくわかる。

八月五日、七カ国・地域の戦争被害者団体の代表が外務省を訪れ、被害補償を求めた。同じ五日、広島市役所では、日本の本土決戦に備えるため旧日本軍に徴兵され、広島島の部隊で被爆した韓国人男性五人が、被爆者手帳の申請をした。補償行為はあくまで国家の責任だが、日本人一人一人が謙虚に自省し、それをどう表現するか、「平和国家」日本の欺瞞をいま鋭く告発されている。(中国新聞記者)

子どもたちと第五福竜丸

長谷川 潮

一度でも福竜丸を見た子どもは、それを忘れることはないだろう。日本作文の会編『せんそう』(岩崎書店、一九九一年七月)は、明治から現在までの子どもたちによる戦争にかかわる詩と作文を集めたものだが、そのなかに「第五福竜丸」という詩をのせている千葉県の北原由美子さん(六年)も、かならず福竜丸を見ているはずである。

夢の島の中で
福竜丸が泣いている。
という二行で始まる二十三行のその詩は、こう結ばれている。

夢の島に第二の福竜丸が、
並ぶことがないように
私は祈りたい。

保存・展示していることが、子どもたちに福竜丸の被爆を伝えるうえで大きい役割を果たしていることは、いくら強調してもしすぎることではない。もし福竜丸がへだ

口の海に埋もれてしまっていたら、福竜丸に関心を持つ子どもは、今よりはるかに少なかったことだろう。福竜丸の保存を実現させたすべてのかたは、その意味でも、ばらしいことをしてくださったのだし、第五福竜丸平和協会の仕事も本当に大事だ。

むろん実物は見たことがなくても、本などで福竜丸を知る子どももいる。子ども向けの本としては、山口勇子さんの童話『おーい、まっしろぶね』(一九七三)、第五福竜丸平和協会編の写真集『母と子でみる第五福竜丸』(一九八五)、赤坂三好さんの絵本『わすれないうで』(一九八九)、それにわたしのノンフィクション『死の海をゆく』(一九八四)などがある。

船の保存・展示も、本の刊行も子どもへの伝達においてそれぞれ独自の意味を持っている。しかし、ずいぶんたくさんの子どもが知っ

ているようでも、実際は福竜丸を知る者は少数のようである。大石又七さんが、『死の灰を背負って』のなかで、いくつかの高校で話した経験からこう書いている。

「それにしても生徒たちはビキニ事件をほとんど知らない。先生でさえ事件の内容を知らない人もいます。」

知られていないのは、福竜丸だけではないと思う。松川事件も水俣病も知らない高校生や先生はざらにいます。それどころか、日中戦争や太平洋戦争すら確とは知らない人も少なくない。(「福竜丸だより」一六〇号で、清水文裕さんが報告しておられる、「8・6・8・9何の日?」という質問に、広島大学生の正解は三割だったということも、それを裏付けるだろう。)その主たる原因は、それらから目を背けさせようとする学校教育のありかたであり、そのありかたは、一方では東郷平八郎をすべての子どもに覚えさせようとするこつながつている。

こういう時代だからこそ、子どもたちに福竜丸の被爆を伝えることは重要である。また、こういう

わたしはこの春、小冊子ではあるが『展示館の中の船』という福竜丸についての二冊目の本を書いた。これは六年生用の副読本の一冊として、ある出版社から来年刊行される予定で、『死の海をゆく』を読んだ編集者からの依頼によるものだった。枚数の少なさに不安はあったが、広い範囲の子どもに伝えることができる機会は生かしたかった。副読本というものの性質上、当然先生にも読んでもらえるというのも見逃せないことだった。

『展示館の中の船』を読んで展示館にやって来る子どもや先生がいたらいいなと、いまから楽しみにしている。

(国際基督教大学図書館)

